

資料

特殊教育学研究文献目録にみる自閉症研究の動向^{註1}

大野裕史*・鈴木千秋**・梅下弘樹***
辰巳佳寿恵**・杉山雅彦****

自閉症の研究動向を調べる目的で、特殊教育学研究の文献目録に記載されている文献タイトルを調査した。60年代から90年代までの変化を見た結果、自閉症の本態や行動特徴、言語に関する研究は年代に関わらず主要なテーマであった。近年では、自閉症の特性よりも介入に関する関心が高くなって来ていた。地域社会での生活についての研究は現在は少ないながらも、興味を引くようになってきていた。

キー・ワード：自閉症 発達障害 研究動向

I. はじめに

我々は自閉症研究の変遷を調査することを試みた。その背景は次の通りである。

Kannerが1943年⁷⁾に、後に早期幼児自閉症 early infantile autism と命名する症例を発表してから50年以上になる。その間、自閉症の概念や介入の仕方も変わってきている。

自閉症は、初期には分裂病や分裂病質範疇で論じられていたが、Rutter (1968¹⁰⁾) や Wing and Wing (1971¹⁰⁾) のいわゆる言語・認知障害説を経て、近年では発達障害と考えられるようになった (APA, 1987¹¹⁾)。介入も、精神療法・遊戯療法・受容的心理療法から教育的アプローチへと主流が移ったが、教育的アプローチの中にも変化が認められる。

例えば、「発達の遅れと教育」誌1995年1月号が「自閉指導を見直す」と題して特集を組んだ。

「自閉症児への療育や教育的対応は今や広い範囲で行われている。しかし、はたして自閉症への指導法は確立する方向にあるのだろうか。

(中略) また、自閉症特有の方法という点が強調されるきらいもあった。しかし、『発達の遅れ』『発達障害』の観点からは、自閉症のほか他障害も含めた共通部分に関心の的になるし、一方、教育実践の場では、自閉症以外の子どもを交えて一緒に指導する状況が多くある。(p. 6-7)」というテーマの下に2つの立場が、典型的に対比された。一つは、自閉症には精神遅滞とは異なった独自の障害があるため、その特性をふまえて指導する必要があるという主張である (熊谷, 1995¹²⁾; 氏森, 1995¹⁷⁾)。他方は、指導のねらいや方法は障害名から導き出されるのではなく、個々のニーズに応じる必要があるというものであった (藤原, 1995⁹⁾; 小山, 1995¹¹⁾; 緒方, 1995¹⁴⁾; 太田, 1995¹⁵⁾; 山本, 1995¹⁹⁾)。加えて、様々な年齢を対象に、様々な立場から、教育的ニーズ・指導のねらいが提案されていた。

1994年に刊行された「自閉症児の行動療法II」(行動療法ケース研究編集委員会, 1994¹⁰⁾)で小林(1994⁹⁾)は、60年代後半から始まった自閉症児への行動療法の「第1世代」が、後に変革を余儀なくされた、と述べている。

同書で加藤(1994⁹⁾)は小林を受け、「第1世代」と比較しながら「第2世代」の特徴を障害観・プログラムの標的・実施方法(場所)・効果

*埼玉短期大学

**教育研究科

***心身障害学研究科

****心身障害学系

の測定などについて俯瞰している。

1995年「行動分析学研究」は8巻1号で「ノーマライゼーションと行動分析」¹²という特集を組み、この中で井上・井上・菅野(1995⁹)は自閉症者に対する地域生活ベースの介入を報告している。

以上から、行動的介入においては次の変化が生じていると推測する。

- 1) 指導計画の立案にあたり症候群の特性を前提にする必要は必ずしもない。プログラムの受給者のライフスタイルを含めた個別的ニーズを重視する。
- 2) プログラムが実施されるのは大学・研究所のクリニック場面や学校教育場面とは限らない。家庭や地域社会・職場でも介入が行なわれる。
- 3) プログラムの対象は障害児者とは限らない。周囲の非障害児者が対象となることもある。
- 4) プログラムのターゲットは言語指導・教科学習だけではなく、より生活場面での使用を前提とした実用的な側面に拡大している。プログラムの立案にあたり、前者はbottom up方式、後者は問題解決的なtop down方式の考え方を背景とする傾向がある。

そこで本稿では、これらの変化を確認する意図で自閉症研究の動向を調査した。具体的には以下に焦点を当てた。

- 1) 主要な研究テーマはどのように変化したか。
- 2) 自閉症の特性に関する研究と介入に関する研究とを比較した場合、何か傾向が見出されるか。
- 3) 言語・コミュニケーションに関する研究と社会生活面に関する研究とを比較した場合ではどうか。

II. 方法

1. 調査対象

特殊教育学研究1967, 68, 69, 74, 77, 79, 85, 87, 89, 92, 94, 95年掲載分の文献目録の

「行動問題」「精神遅滞(薄弱)」「言語障害」部門の自閉症関連(表題に自閉のついているもの)論文・発表を対象とした。目録は前年の文献を掲載しているため、対象文献が公表されたのは実際には、1966, 67, 68, 73, 76, 78, 84, 86, 88, 91, 93, 94年であった^{13,4}。但し、編集に研究団体が関与していない雑誌¹⁶は今回の調査対象から除外した。研究の紹介が多いと考えたためである。

行動問題以外に、精神遅滞・言語障害部門を対象としたのは、次の理由による。

DeMyer, Barton, Alphern, Kimberlin, Allen, Yang, and Steele (1974²¹)の調査によれば、自閉症児の94%がIQ 68以下であり、知的障害を伴う。また現在、自閉症を発達障害とする捉え方が優勢であり、精神遅滞部門に関連文献が紹介されている可能性がある²²と推測した。言語障害部門は、同じく自閉症児者が持つコミュニケーション障害との関連からである。

対象とした文献の数はTable 1, 2に示した。

特殊教育学研究を対象にした理由は、1)特殊教育関連の文献目録が他に適当なものが見つからなかったこと、2)特殊教育学会は、会員数3417名を擁する(日本特殊教育学会事務局, 1994¹³)有数の学会であり、活動もアクティブであること¹⁶、3)文献目録については、特殊教育学研究第2巻(1965年)から、初期には執筆者名なしで継続して掲載されており、信頼に足ると期待したこと、による。

2. 分類カテゴリーの作成

特殊教育学研究第32巻1号掲載分(作業開始時最新文献目録)行動問題(2)―自閉症関連―187件を対象に表題からキーワードになるとと思われる単語209語を抽出した。その後、抽出した単語をそれぞれ関連すると思われる66のグループにまとめ、コード化しdescriptorとした。descriptorをさらにまとめ、20の上位カテゴリーを作った(Appendix)。これらの作業は、メンバー全員の合意のもとに行なった。

3. データ

文献目録記載の表題に対してdescriptorを

Table 1 自閉症関連文献数

発行年		66	67	68	73	76	78	84	86	88	91	93	94	合計
行動問題	論文	2	18	14	23	21	55	27	65	48	44	92	21	430
	発表			2	16	22	40	37	47	64	57	90	62	437
精神薄弱	論文			2				7		1	3	6		22
	発表		4	1		3					4	5		18
言語障害	論文			1	3	5	4	2	1	7	2	4	7	36
	発表		1		2	2	1	1	3			1	7	18
合計		2	23	20	44	53	100	74	116	120	110	198	97	961

Table 2 対象文献数

発行年		66	67	68	73	76	79	83	86	88	91	93	94	合計
行動問題	論文	2	18	14	17	20	49	23	44	47	33	71	21	359
	発表			2	16	22	40	37	47	64	57	90	62	437
精神薄弱	論文			2				4		1	2	4		16
	発表		4	1		3					4	5		18
言語障害	論文			1	3	5	4	2	1	7	2	4	7	36
	発表		1		2	2	1	1	3			1	7	18
合計		2	23	20	38	52	94	67	95	119	98	175	97	884

振った。本調査では、descriptor の数を基本データとしている。1つの文献に対して複数の descriptor が振られることが常であるため、descriptor の総数は対象文献数よりも多い。

4. 信頼性

次の2点につき2名の独立した評定者間で信頼性を検討した。

(1) descriptor の信頼性

表題に対して振った descriptor の信頼性を検討する目的で、descriptor の56.4% (8年分) を対象に、一致した descriptor の数を各評定者の descriptor 数の平均で除して一致率を算出した。

評定者間の全体の一致率は、86.8%だった。

(2) 表題から類推した際の信頼性

本稿では文献の表題から研究動向を推測する方法を採っているが、表題が実際の研究内容を反映している保証はない。そこで、対象にした文献のうち特殊教育学研究に掲載されている論

文を対象に(18件、全体の2.0%)、実際に論文に当たり、表題から付けた descriptor との一致度を以下の方法で検討した。

当該文献につけた descriptor の中で、表題から付けた descriptor (D1) と論文にあたった descriptor (D2) とを比較した。表題と論文とでは情報量が違うので、D1 が D2 に含まれているかどうかを判断することで一致率を算出した。

「一致」を「D1 で D2 に含まれているもの」、「不一致」を「D1 で D2 に含まれていないもの」と定義し、一致数と不一致数の和で一致数を除して一致率を求めた。結果は85.5%だった。

III. 結果と考察

1. 研究テーマ

Table 3 に各カテゴリーに属する文献数を年代毎に示した。

年代を経るに従いカテゴリーが増えていった。つまり研究領域が拡大していったといえる。

Table 3 カテゴリー別にみる研究動向の年代変化

各カテゴリーに含まれる descriptor を持つ文献数を年代毎に示した。

	60年代	70年代	80年代	90年代	総計
自閉症	17	自閉症 81	自閉症 82	自閉症 119	自閉症 299
指導法	9	言語 32	言語 47	言語 87	言語 170
言語	4	対人関係 15	知覚-認知 29	成人・年長 48	成人・年長 81
対人関係	3	教育システム 13	成人・年長 27	対人関係 47	対人関係 79
社会システム	3	指導法 13	生理指標 23	知覚-認知 35	知覚-認知 71
問題行動	2	課題学習 9	指導法 20	非言語 31	指導法 64
教育システム	2	社会システム 8	問題行動 14	教科学習 30	問題行動 48
自我	1	知覚-認知 6	対人関係 14	問題行動 29	非言語 48
知覚-認知	1	成人・年長 6	課題学習 14	般化・自発性 28	教科学習 48
非言語	1	非言語 4	教科学習 14	社会システム 26	生理指標 46
教科学習	1	生理指標 4	非言語 12	社会生活 25	課題学習 44
投薬	1	問題行動 3	教育システム 11	指導法 22	社会システム 41
		教科学習 3	般化・自発性 6	課題学習 21	教育システム 40
		社会生活 3	社会生活 5	生理指標 19	般化・自発性 35
		自我 1	就労 4	教育システム 14	社会生活 33
		般化・自発 1	社会システム 4	その他 7	就労 10
			投薬 4	就労 6	投薬 7
				自我 2	その他 7
				IEP 2	自我 4
				投薬 2	IEP 2
カテゴリー数	12	16	17	20	20

総計で上位のカテゴリーをみると、「自閉症」「言語」「成人・年長」「対人関係」となっていた。すべての年代を通じて「自閉症」の特性に関する研究が占める割合が多かった。続いては「言語」をテーマにしたものであった。自閉症と言語の関連については、研究の早期から主要なテーマになっていたことが示される。「対人関係」については他では上位にあるが、80年代では一端少なくなっている。代わりに、80年代には「知覚-認知」研究が増えている。これは言語・認知障害説を背景にし、Hermelin and O'Conner (1970⁴⁾) が先鞭を付けた研究が興隆したためと考える。

研究領域については、60年代では「自閉症」「自我」「知覚-認知」「問題行動」「言語」「非言語」「対人関係」「教科学習」「教育システム」「指導法」「社会システム」「投薬」がテーマとなっていた。70年代に入ると、「般化・自発」「課題学習」「成人・年長」「社会生活」「生理指標」、

80年代では「就労」、90年代には「IEP」⁶⁷ が加わった。

70年代では「課題学習」によるアプローチが中心となる反面、「般化・自発性」の問題も指摘され始めたのだろう。小林 (1994⁹⁾) の印象を裏付けるともいえる。

幼児だった自閉症児も加齢を迎える。「成人・年長」が70年代に出現し、80年代では「就労」もテーマになったのは、そのような背景かもしれない。

2. 特性研究と介入研究の推移

自閉症というラベルを持つ児者の特性に関する研究と、彼/彼女らへの直接・間接的サービス・指導などいわゆる介入に関する研究の推移をみた。

descriptor の Aut, GoV, ReD, CoD, Prt, Phy, を「特性に関する研究」、SpT, Tct, Nam, Mnd, FVI, Ech, CoT, SST, SGe, RGe, Gen, Spt, SeC, TsL, IEP, IoG, PIT, TEC, ReE,

特殊教育研究文献目録にみる自閉症児の動向

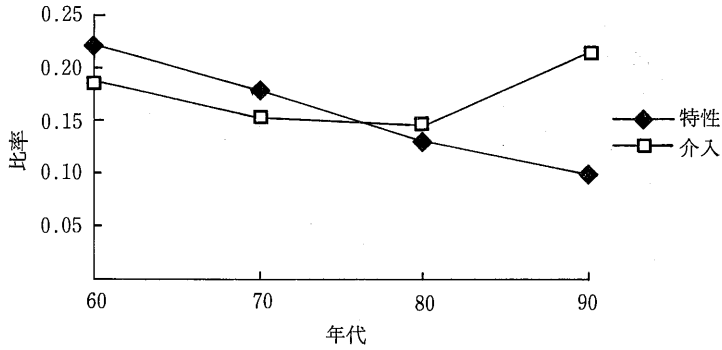


Fig. 1 特性研究と介入研究との比較

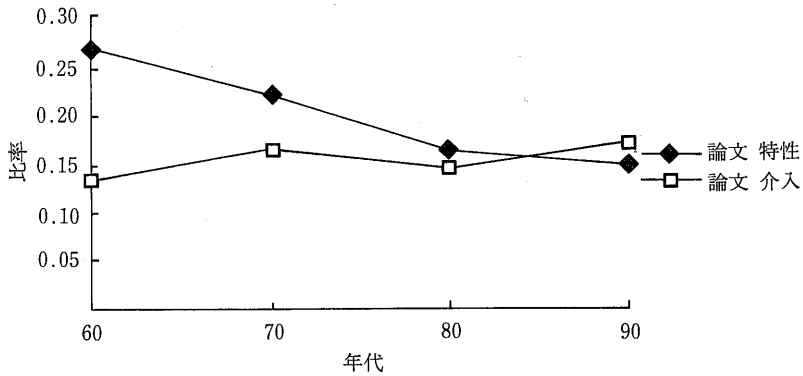


Fig. 2 論文にみられる特性研究と介入研究の比較

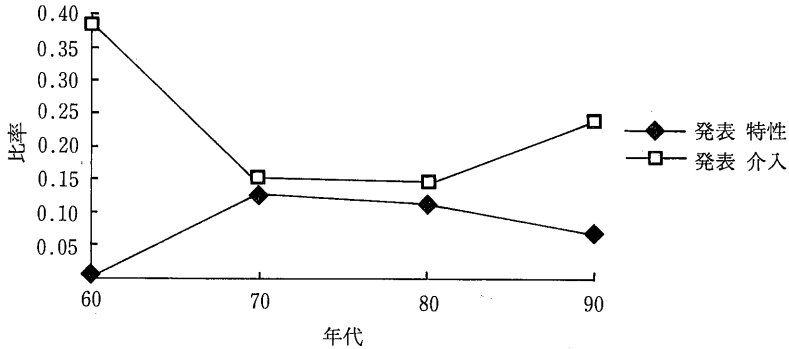


Fig. 3 発表にみられる特性研究と介入研究の比較

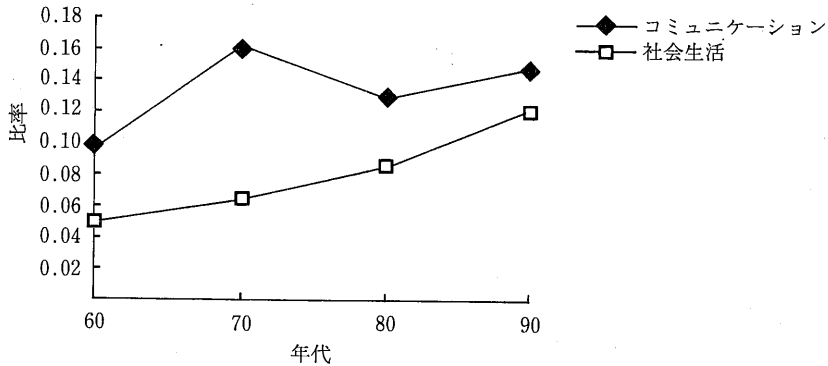


Fig. 4 コミュニケーションに関する研究と社会生活に関する研究の比較

HId, Dou, OtE, CLS, FaS を「介入に関する研究」として、その推移を比較した。

Fig. 1 は部門・文献形式（論文か発表か）を問わずに、それぞれの年代毎の件数を当該年代の総件数で除した値を示している。つまり、「特性研究」「介入研究」と分類した descriptor が当該年代の総数に占める比率を表わしたものである。

60, 70 年代では特性に関する研究の方が若干多かったが、80 年代以降では介入研究の方が多くなった。特性研究は年代を経るに従い減少しているが、これは今回たてた特性研究を定義する descriptor に関する研究領域が相対的に少なくなった、つまり他の descriptor に分類されるテーマが多くなったためと考える。

自閉症の概念については、DSM-III-R の提示する網羅的記述で安定し、本態論についての関心が払われなくなったことによるのかもしれない。

文献目録を作成しているのが教育系の学会であるため、本態論についての文献が収集できていないことも考えられる。

特性研究と介入研究との差を文献形式毎に示したのが、Fig. 2 と Fig. 3 である。介入研究が特性研究を上回ったのは、論文では 90 年代に入ってからだが、発表ではすべての年代で上回っていた。

この要因の一つは論文と発表では作成者の母集団が異なることによると推測する。論文を作成するにはそのスキルのトレーニングを受ける必要があり、母集団が限定される。作成者の大部分は、いわゆる研究者集団やその指導下にある大学院学生であろう。一方、発表では論文に比べ限定は緩やかであり、特別なトレーニングを受けていない者、論文執筆の条件を作りやすい者でも可能である。母集団としては、前述の研究者集団に現場の教員・職員が加わっている（井田・中田・佐島・佐藤・大塚・川間・小野・加藤・加藤・名川・細川, 1994⁵⁾）。

これら母集団の差と、彼らの関心のあり方、データとしやすい現象などの差が反映された結

果と推測する。

二つめは、内容的な違いである。論文⁶⁾には特定のフォーマットがあり、選択が行なわれる。それに比して、口頭発表ではフォーマットは緩やかである。レフェリーも存在しない。日々の実践は、一般的な実験計画に乗りにくい。そこで論文にしやすいテーマと、しにくいテーマとが存在するのかもしれない。

3. コミュニケーション関連と社会生活関連

Fig. 4 ではコミュニケーションに関する研究と、社会生活に関連する研究の変遷を比較した。コミュニケーションに関する研究としては、カテゴリー名「言語」「非言語」とコミュニケーション障害 (CoD) を充てた。社会生活に関連する研究としては、カテゴリー名「成人・年長」「社会生活」「就労」「社会システム」を充てた。そして、これらに含まれる descriptor 数が当該年代の総 descriptor 数に占める割合を年代毎に求めた。

どの年代においてもコミュニケーション研究の方が、社会生活研究よりも上位であった。コミュニケーションに関する研究は 70 年代が最も高いが、その後も安定している。Fig. 3 では 70 年代以降「言語」が第 2 位を占めている。社会生活に関する研究は、比率はコミュニケーション研究よりも低い、年代を経るに従い増大する傾向がある。

IV. まとめ

研究テーマについては、自閉症の行動特徴や本態に関する研究はすべての年代に渡りメインのテーマである。しかし年代により新しく展開する研究領域もある。これは、対象児の成長、自閉症論の変化、介入方法の発展などの影響を受けていると推察する。

自閉症の特性に関する研究と介入に関する研究との比較においては、近年、介入研究が多くなってきた。文献の様式による違いもあった。

依然、言語・コミュニケーションに関する研究は主要なテーマであるが、社会生活に関する研究も年代を経るに従って増加してきている。

注1：本研究を行なうにあたり人間学類3年常松美保子さん・羽生裕子さんのご協力を得た。彼女たちも資料収集・分析に関わったことを記すとともに感謝する。

注2：アクションエディターは望月昭。尚、この特集は自閉症だけを対象としているのではない。

注3：これ以降では、年は掲載年ではなく元文献の公表年を示す。

注4：調査した目録の年代は等間隔ではない。その理由は、初め1994年掲載分から5年おきに調査をしたが、その後対象を増やしたことによる。5年の真ん中を埋めることはできない。また60年代は65年(特殊教育学研究第2巻)から目録が掲載され始め、90年代はまだ半ばであることも、年代のばらつきに影響を与えている。

注5：除外した文献は、次の通りである。言語、作業療法、実践障害児教育、障害児の診断と指導、小児科、小児科臨床、精神医学、精神療法、臨床精神医学、臨床脳波

注6：1995年度(本稿執筆年度)の大会プログラムには11領域、444件の口頭発表があった。

注7：「その他」は除いた。

注8：目録で「論文」に分類されているものすべてが、学会誌論文であるというわけではない。

文 献

- 1) American Psychiatric Association (1987): Diagnostic and statistical manual of mental disorders (Third edition Revised): DSM-III-R, Published by American Psychiatric Association, Washington DC.
- 2) DeMyer, M. K., Barton, S., Alpern, G. D., Kimberlin, C., Allen, J., Yang, E., & Steele, R. (1974): The measured intelligence of autistic children. *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, 4, 42-60.
- 3) 藤原義博(1995): 個別プログラムの視点から。発達遅れと教育, 445, 日本文化科学社, 20-21.
- 4) Hermeline, B., & O' Connor, N. (1970): Psychological experiments with autistic children. Pergamon Press, London.
- 5) 井田範美・中田英雄・佐島毅・佐藤至英・大塚玲・川間健之介・小野純平・加藤靖佳・加藤哲文・名川勝・細川かおり(1994): 日本特殊教育学会大会発表論文からみた特殊教育30年の動向. *心身障害学研究*, 18, 191-204.
- 6) 井上雅彦・井上暁子・菅野千晶(1995): 自閉症者に対する地域生活技能援助教室: 料理スキル獲得による日常場面の料理行動の変容について. *行動分析学研究*, 8, 69-81.
- 7) Kanner, L. (1943): Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2, 217-250.
- 8) 加藤哲文(1994): 自閉症の行動療法の第2世代. 行動療法ケース研究編集委員会編(編集担当 小林重雄): 自閉症児の行動療法II: 行動療法ケース研究 10, 5-15, 岩崎学術出版社.
- 9) 小林重雄(1994): 前書き. 行動療法ケース研究編集委員会編(編集担当 小林重雄): 自閉症児の行動療法II: 行動療法ケース研究 10, 1-3, 岩崎学術出版社.
- 10) 行動療法ケース研究編集委員会編(編集担当 小林重雄)(1994): 自閉症児の行動療法II: 行動療法ケース研究 10, 1-3, 岩崎学術出版社.
- 11) 小山創(1995): 特殊学級における自閉症教育. 発達遅れと教育, 445, 日本文化科学社, 8-9.
- 12) 熊谷高幸(1995): 自閉症には独自の障害と配慮が。発達遅れと教育, No. 445, 日本文化科学社, 23-24.
- 13) 日本特殊教育学会事務局(1994): 日本特殊教育学会の沿革. 日本特殊教育学会会員名簿(1994年度版), 203-204.
- 14) 緒方明子(1995): 個のニーズに応じた支援を。発達遅れと教育, 445, 日本文化科学社, 14-15.
- 15) 太田俊己(1995): 学級の一員のA君として。発達遅れと教育, 445, 日本文化科学社, 18-19.
- 16) Rutter, M. (1968): Concepts of autism: A review of research. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 9, 1-25.

- 17) 氏森英亜(1995): 自閉症には独自の困難が、
発達の遅れと教育, 445, 日本文化科学社,
16-17.
- 18) Wing, L., & Wing, J. K. (1971): Multiple
impairments in early childhood autism.
Journal of Autism and Childhood Schizo-
phrenia, 1, 256-266.
- 19) 山本淳一(1995): 個への援助の視点から、
発達の遅れと教育, No. 445, 日本文化科学
社, 22-23.

Appendix

分類カテゴリーと Descriptor

自閉症とは何か

- 1) Aut 自閉症論 凡例; 症状形成・折れ線型
(自閉症)・多彩な症状・知覚変容現象・知
的高発達自閉症・妄想形成
- 2) OvV 概説・展望・動向・文献・歴史
- 3) ReD 関連疾患・症候群 凡例; てんかん・
てんかん発作・精神障害・猫啼き症候群
- 4) Chd 対象児者の評価 凡例; スクリーニン
グ・診断・発達予想・面接技法・テストの
有効性
- 5) Dev 経時的变化 凡例; 縦断研究・長期予
後・発達経過・発達の検討・発達の変容
- 6) CoD コミュニケーション障害: コミュニ
ケーションの障害について言及しているも
の。言語 (language, speech) に関するもの
は、後の言語障害 SpD としてチェックす
る。介入は行なわれていない。凡例; 無発
語・ことばをもたない

自我

- 7) Sel 自己像: 自己像, self image について
言及しているもの。他の表現でもかまわな
い。

知覚—認知

- 8) SeP 感覚・知覚 凡例; 運動感覚・感覚性・
刺激の選好・視知覚・皮膚感覚
- 9) Cog 認知特性 凡例; 過剰選択性・記憶特
性・空間認知・継次総合活動・推理能力・
推論機構・知能構造・注意過程

問題行動

- 10) PrB 問題行動: 問題行動について言及して
いるもの。介入の有無は問わない。凡例;
こだわり・パニック・固執行動・常同行動・
偏食・暴力行為・行動問題

言語

- 11) Tct 報告言語行動 (タクト) の形成: 機能的
な観点が含まれているもの。凡例; 助言活
動・助言行動の獲得・情報提供行動の形成・
報告行動の形成
- 12) Nam 命名: 絵カードや物の命名を扱って
いるもの。機能的な観点が含まれる場合は、
11) Tct に分類する。
- 13) Mnd 要求行動 (mand)
- 14) FVI 機能的言語行動 (指導法): 機能的な言
語行動を形成するための技法について言及
しているもの。凡例; 機会利用型指導法・
機能的等価性・言語機能
- 15) FVT 機能的言語行動 (標的): 機能的な言
語行動の標的行動について言及しているも
の。凡例; 指示者の行動変容・聞き手の選
択行動
- 16) Ech 音声模倣 凡例; 音声フィードバック
- 17) SpE 言語表出: 11)-16) に分類されない (不
明であったり) が、言語表出に関するもの。
凡例; 表出言語
- 18) SpR 言語理解: 11-16 に分類されないが、
言語理解・言語受容に関するもの。凡例;
理解語彙
- 19) Lan ことばの高度な使用 (形式的側面) 凡
例; 2語発話・比喻表現・文脈構成・並列助
詞
- 20) SpT 言語指導: 11)-19) に分類されないが、
言語の指導 (介入) に関するもの。凡例; 言
語治療計画・共同行為ルーチン
- 21) SpD 言語障害: 言語の障害について論じて
いるもの。介入については不明なもの。

非言語的コミュニケーション

- 22) NVC non-verbal communication: 凡例の
ように、非音声言語的コミュニケーション
について言及しているもの。コード化がな
されているものに限る。つまり、ジェス
チャーや指さし・表情などは含まない。介

入の有無は問わない。凡例；サイン言語・
会話エイド・図形シンボル

- 23) Pit 指さし・pointing
24) EEB 情動表出行動
25) CoT コミュニケーション訓練：13)-26)に
分類されないが、コミュニケーションにつ
いての指導・介入が行なわれているもの。

対人関係

- 26) SST 社会的スキル訓練：対人関係技能につ
いて指導されているもの。1)-25)までに分
類できるものは含めない。凡例；主張反
応・仲間媒介法
27) Act 愛着行動・attachment：対象・介入の有
無は問わない。凡例；strange situation・愛
着対象
28) Prt 親：親の状態・親との関係などについて
評価しているもの。介入が行なわれている
場合は、53)FaS にチェックする。
29) Tcr 教師：教師の状態・教師との関係につ
いて言及しているもの。介入の有無は問わ
ない。
30) THu 対人行動：26)-30)以外の対人関係に
ついて言及しているもの。介入の有無は問
わない。凡例；joint attention・社会的相互
作用

般化・自発性

- 31) SGe 場面般化：場面般化・対人般化など刺
激般化について言及しているもの。
32) RGe 反応般化：一般化された反応につ
いて言及しているもの。厳密な意味での反応般
化よりは、等価性・反応クラスの形成につ
いて言及しているものが多いと推測する。
33) Gen 般化一般：31), 32)に関する記述が特
にないもの。
34) Spt 自発性：反応の自発性について言及し
ているもの。
35) SeC セルフ・コントロール 凡例；セルフ
マネージメント・自己記録手続き・自己記
録法

課題学習

- 36) TsL 課題学習：いわゆる課題学習。スキル・
トレーニング。各教科については「教科学

習」に分類する。凡例；課題遂行・概念・学
習行動の形成・学習態度・学習達成過程・
見本あわせ・御用学習・図形弁別・弁別学
習

IEP

- 37) IEP 個別教育計画

教科学習

- 38) AcL 教科学習：国語・算数・理科・社会・英
語など主要科目について。凡例；加法操作・
数量概念・文字
39) Drw 描画活動：図工関連。
40) Ath 体育系 凡例；ムーブメント教育・水
泳指導・水中運動・精神運動発達・力の獲
得
41) Gam 遊び・ゲーム 凡例；ゲーム行動・
ゲーム指導・ジャンケン・象徴遊び・母子
遊び場面

教育システム

- 42) Sch 学校という場：学校での活動 凡例；
学校教育の実態・学校生活の調査・通級指
導
43) Min 統合保育
44) IoG 指導形態：凡例のように個別・集団に
ついて言及しているもの。凡例；個別指
導・(小) 集団指導

指導法

- 45) PIT play therapy
46) TEC TEACCH
47) ReE 治療(的)教育
48) Hld 抱っこ法 凡例；立ち抱っこ
49) Dou 動作法
50) OtE その他の指導法

成人・年長者

- 51) Adl 年長(自閉症児) 凡例；思春期・自閉
症者・障害者・成人(期)・青年(期)・大
人

社会生活

- 52) ADL 日常生活動作
53) CLS Community Living Skill 凡例；

- バス乗車・金銭・硬貨の構成・生活維持・
生活指導・買物スキル・余暇活動
54) GrH グループホーム
55) Sol 社会的自立

就 労

- 56) Voc 就労 凡例；就業指導・職業的活動

社会システム

- 57) FaS 家族への援助 凡例；親子合宿・親指
導・母子入所指導・親のストレス・親の障
害受容
58) CoS 地域でのケア 凡例；巡回相談・地域
ケア・地域生活・地域生活援助・地域療育
システム
59) SoR 社会的資源 凡例；短期集中療育・通
園施設・通所指導・特別処置事業

生理指標

- 60) Phy 生理的指標 凡例；EEG・自律系反
応・心拍・神経心理学・生理・生理心理学・
脳波・脳波基礎律動・皮膚電気活動・サー
カディアンリズム

薬 物

- 61) Drg 薬物

その他

- 62) TOB 対物行動・関係
63) Soc 一般社会の反応 凡例；障害理解・新
聞報道
64) Cri 危機的状況
65) Dep 抑うつ状態
66) RFm 家庭との連携 凡例；連絡帳

Bull. Spec. Educ. 20, 163-172, 1996

Research Trends of the Children/People with Autism : By Analyzing the Bibliography of the Japanese Journal of Special Education

**Hiroshi OHNO, Chiaki SUZUKI, Hiroki UMESHITA,
Kazue TATSUMI, and Masahiko SUGIYAMA**

The research trend of the children/people with autism was examined by analyzing the bibliography of the Japanese Journal of Special Education. The following conclusion was obtained by comparing bibliographies from 60's to 90's. The researches concerning characteristics of the syndrome, and communications are main research areas. The researches concerning the intervention are more active than the characteristics researches recently. The interest in various sides of the social life of children/people with autism has increased in recent years.

Key Words : autism, developmental disorder, research trends